

クロアチアを訪ねて

08. 03. 29. ～ 04. 05.

中村哲之助議員の訪問記

私は2008年3月29日～4月5日の8日間、クロアチア共和国（以下、CR国）を訪問し、福祉・教育・観光・都市整備などの分野を視察調査した。これまでCR国はユーゴスラビアからの分離独立後も日本人があまり訪れることがなく、わが国では十分にその存在を知られていない。そのため、CR国を訪問すると決めた時に、何人かの方から「まだ危険ではないのか、地雷が一部残っているのではないか」などの指摘までいただいた。従って、現地訪問にあたって、事前の手配など多くの労力を要したが、エムオーツーリストをはじめ多くの関係者の協力を得て、各界の方々との懇談・意見交換ができるなど、今回の訪問は大きな成果を上げることができた。これは民主ネット議員団（7人）の視察であり、すでにそのレポートを提出したが、その際に報告していないことなども含め、旅日記風のレポートを作成した。ご一読いただき感想をお寄せいただければ幸いである。

なお、このレポートは年鑑や統計書などによって詳しく知ることのできる部分は省略し、現地で見聞して「なるほど」と思うものを中心にまとめている。



<はじめに>

私達は昨年の7月中旬から会派の海外行政視察の検討を始めた。私達が取り組んでいる政策課題での先進事例や、その国の重要な事案への取り組みなどを中心に、ドバイやヨルダン、北欧、アメリカなどの福祉制度・危機管理・観光対策などをチェックし、最終的に今回のCR国を訪問先と定めた。その理由は主に、

- (1) これまで大手旅行業者の広告にほとんど登場しなかったCR国が最近（とりわけ1年程前から）パック旅行に表れるようになった。なぜ、このように急激な変化が生じたのか
- (2) CR国大使館が設置されてはいたが昨年秋にCR国の観光局が東京に事務所を構え、特に観光に力を注ぎ始めた
- (3) ユーゴスラビアからの分離独立・内戦は誰でも知るところであるが、その復興のために、とりわけインフラ整備にどんな手だてを講じたのか

(4) 独立から約 10 年余り、旧社会主義体制から市場経済化への動きの中で、国民の暮らし、経済活動はどう変化しているのかなど、調査対象としてふさわしいと判断した。

さらに、今回の訪問にあたって、宗教上の紛争が CR 国内にはないとのことも要因の一つである。私達はイスラム世界については余り知らないが、宗教上の紛争が生じているとその実情把握は非常に難しく、キリスト教信者が大半というのも、選びやすかった。

< 事前の調査と準備 >

CR 国自体を知っている人が少なく、そのために私達は海外行政視察でこれまで、官庁関係や大手企業がよく利用している「エムオーツーリスト」に視察の計画を打診し、調査項目を示し、先方の日程調整が可能かどうかの調査を依頼した。最も困ったのは、日本人が他国の観光地のようにそれほど訪問していないため、どの旅行社にも現地事務所がなく、連絡が十分にできなかったことである。

幸いにして、2001 年から CR 国に住む長束恭行（ながつか やすゆき）氏がこの視察に協力願えるとの報告を受け、以後、CR 国との窓口は同氏をお願いすることにした。また、私達の訪問中は同氏に現地のスルーガイド・通訳として同行していただくことを確約してもらい、ようやく昨年暮れから本格的な日程調整を進めることができた。

さらに今年初めから視察団メンバーの 7 人で調査項目を絞り、CR 国への連絡や準備をお願いした。この際、私達が特に注意したのは、いわゆる「政調費」の扱いである。昨年 2 月に政調費の目的外使用が大きく取り上げられ、返還を求められる事例が多くあったことから、調査項目、日程、ホテル、食事などの選定と金額で旅行会社から示された素案がルールを逸脱していないか、誤解を受けることのない計画であるかなど事務局とも事前に協議を行った。その結果、一部の地域では宿泊予定ホテルのグレードを落とした方がよいのではないかと、ホテル変更を行ったところも出てきた。ホテル事情などは現実に CR 国に着いてからでしか分からないが、政調費の宿泊費に関するルールはもう少し弾力的な運用をしなければいけないのではないかと思う。

クワチアへ出発 (3月29日)

いよいよ CR 国へ向けて出発である。関西国際空港(以下、KIX) 4 F の国際線出発フロア・B カウンター前に 8 : 40 集合となっている。私は守口市駅 7 : 30 発のリムジンバスで行くことに。8 : 30 頃に到着して B カウンター前へ行くと、私達の視察補助員（添乗員）としてお願いしている国友美紀さんがすでに待っていてくれた。全員が揃うとさっそく大きなスーツケースを預ける手配。最近は旅客者一人ひとりが自分の荷物をチェックインカウンターで搭乗券とともに示さなければならず、またチェックも厳重になったので、一昔前に比べると倍くらいの時間を要する。9.11 テロ以来、徐々にその厳しさの度合いを強めている。これも安全性確保のためで仕方がないと思うが、改めてテロや暴力、破壊行為のない平和な社会の大切さを認識する。

エコノミー客は一人当たり 20kg までとされているため、私は前夜に着替えのスーツや下着などの荷物を一部出して家に置いてきた（ようやく 19kg に）。

これらが終わるといつものように、金属探知機を通り危険物を機内に持ち込みしないかのチェック。上着やコート、ベルト、時計、ネクタイピン、カメラなどをトレイに入れさらに目薬などの「水」に関するものは 100ml 以内×10 本までを専用のナイロン袋に入れて提示する（100ml を超える化粧品などを持っている人は没収）。

ようやく構内に入って私達は 3 F のロイヤルキャフェテリアでコーヒーなどを飲んで小休止。10：10 の搭乗案内まで少しある。

CR 国には KIX からの直行便がないため、KIX フランクフルト（以下、FRA） クロアチア・ザグレブ（以下 ZAG）と乗換えなければならない。10：40 発 L H741 便 FRA 行きの搭乗開始のアナウンスが流れ、私達も機内に。席は後方の 56・K である。着席してベルトを締め、離陸を待っていると 10：50 に動き出し、10：55 離陸。機は一路北東へ向かい、新潟上空を通り、シベリア フィンランド バルト海 南下し FRA へ。離陸して 30 分余りすると前の画面には高度 8,000m、機外温度 - 43 と出ている。

安定飛行になって落ち着くと多くの人が上着を脱いだりしてくつろぎ始める。飲み物サービス・食事が出てくる。私達の座席はエコノミーだから、もちろん普通の食事。配られたメニューには「牛肉丼」と印刷されている。

搭乗直後の機内アナウンスで、飛行時間や機内サービスの内容とともに、「この機には日本人の客室乗務員（キャビン・アテンダント＝スチュワーデス、以下 CA）が 3 人乗務していますので、お気軽に声をかけてください」と伝えたのに、後部には一人の日本人 CA もいない（機内は前・中・後部と 3 分割しカーテンを引いている）。

食事を終えてコーヒーを飲み、私の好きな小説を読み始める。佐伯泰英のシリーズで一気に読み切ってしまった。時計は 16：25、現地時刻は朝の 8：25 である。ちょうどイルクーツクの上空で、高度 9,601 m、飛行速度 896km/H、あと 5,070km、外気温 - 55 と前の画面に出ている。窓から少し覗き込むようにして下を見ると、巨大な真白の氷の帯が見える。多分大きな川ではないだろうか。また、この太い帯に細い線が無数に繋がっている。これは大河に注ぐ中小河川だろうと思う。



このあたりで、FRA までの半分を飛行したことになる。エコノミー症候群といわれることのないよう、周囲では多くの年輩の女性（ドイツ人？）が固まってトイレ付近でギャーギャーと井戸端会議。私も立ち上がってトイレへ行き屈伸運動。2～3分機

内をウロウロして、一眠りしようと席に戻るが日本時間ではまだ夕方で、眠くならない。仕方なく、TVを少し見たり、日本の新聞を読んで時間を過ごす。LH 741 便は背もたれに個々のTVが用意されているので、大抵の乗客はこれを見るか目を閉じている。

FRA 到着2時間程前に夕食が出る。料理はうなぎの蒲焼弁当。日本ではもう夜の9時頃だからきっと食事を終えて寛いでいる時間だと思う。FRA は昼を過ぎたところだから、これは昼食になるのだろうか。私はドイツのビールを頼み、美味しくいただいた。



到着に備えてスリッパを脱いで靴を履こうとすると、足がむくんで少し苦労した。知らない内に血液が下がって血行不良になっているのがよくわかる。FRAへは15:02着(日本は深夜23:02)である。少し眠い。

以前にも私はここを訪れたが、本当に大きな空港で、一体、KIXの何倍あるのだろうかと思う。私達はこれからここで約5時間もCR国行きの飛行機を待つことになる。今までの経験では、長くても2時間余りだったから気の遠くなる程の待ち時間だ。

私達はカフェラウンジに陣取ってドイツビールを1~2杯飲んだ後、出発ゲート前でウトウト。本当にくたびれ果てた頃、ZAG行きの搭乗案内。B25ゲートから搭乗し、私の席22・Bにつくと20:50。すでに出発の時刻だが、少し遅れて21:00に離陸。CR国航空OU 415便は先ほどのLH 741便に比べると少し狭い気がする。しかし、機内はガラ

ガラで、乗客は空いた席へ移ってゆっくりしている。機内では軽食が出され、22:15にZAG到着。ここでは荷物も早く出され、CR国の入国手続きなどもスピーディで、22:35にはスルーガイドをお願いしている長束恭行氏に出迎えられる。

早速、長束氏の案内で空港内の両替所に行き、両替。長束氏は「1万円くらいで十分だと思います。市内にも両替所があるし、ドルやクレジットカードで対応できますよ」と言うので、私は1万円を出すと452.67Kn(クーナ)になった。手数料を入れて1Kn 22円である。

私達の最初のホテルはフォーポイント・シェラントンで23:10に到着。日本ではもう朝方の7時過ぎ。ほぼ一日中徹夜の状態だからもうクタクタ。国友さんが3月30日の予定のメモを渡し「明朝は7:30にモーニングコールを入れます。ここで3連泊しますので、荷物は置いたままでどうぞ」と、翌日以後の概要を説明。私の部屋は1409号である。部屋にはスリッパもであると事前に案内されていたが、探しても見当たらない。仕方なく、機内で使った

スリッパを取り出して使うことに。パジャマを出し、バスタブに湯を張りながら、今日一日の出来事をメモ。そうしないと、海外では2～3日も経つと主だったことでも時間軸がずれたり、忘れてしまうのである。もう深夜の1:00(日本では朝の9時)を回っている。

内戦の傷跡を見学 (3月30日)

今朝は7:30のモーニングコールだが、1～2時間おきくらいに目が覚め、何か睡眠不足のまま6時前にベッドを出た。カーテンを開けると外はまだ暗い。早速お湯を沸かして緑茶を飲むと、やはり落ち着く。私は冷たい飲み物は苦手なので、持ってきたステンレスのポット(水筒)にお茶を入れる。昨夜は疲れていたの十分に整理できていない荷物などをチェックしているともう7時。外はすっかり明るくなっている。7:30にモーニングコールがあり、5分ほどすると、また電話の呼び出し音。出てみると国友さんが「ホテルからモーニングコールありましたか?」と念のために電話をくれたようである。

8:00になり、1Fのレストランへ朝食(アメリカンスタイルのバイキング方式)に行き、私の海外での朝食パターンとなっている「野菜・チーズ・玉子・コーンフレーク+牛乳・ヨーグルト・フルーツ」を取ってくる。CR国では野菜が十分にあるだろうか心配していたが、十分過ぎる程用意されており、それだけで満足である。2年前にウズベキスタンを訪れた際は、絶対に生野菜を食べないようにと言われていたことを考えると大違いだ。水道水も飲まない方が良いが、飲んで大丈夫だと言うからありがたい。

8:45部屋へ戻ってカッターシャツをクリーニングに出す。9:00にロビー集合、9:05出発である。この日は日曜日で役所はお休みのため、私達はユーゴスラビアからの分離独立の際の激しい内戦を永遠に忘れず、それらを記録に残そうと戦争博物館の準備をしている場所を訪問することになっている。



空爆で大きな穴があいてしまった橋もそのまま

現地には9:50頃に到着。破壊された建物、廃墟のままの学校・戦車・旧ソ連のミグ戦闘機・大砲などが野ざらしのままに置かれ、さらに道路を挟んだ角に慰霊碑・墓標があり、内戦で亡くなった人達の多くの名前が刻まれている。

1991年の内戦では、CR国で15,000人が死亡したようである。CR国の人口が約450万人だから、我が国に当てはめると約40万人の国民が亡くなったことになる。

ここにはドイツや近隣の国から

モーターショーを見にきたという人や、CR国の若者もグループで訪れていた。

ここを見学した後、ラストケという小さな村落に到着(トイレ休憩)。私はデジカメの時差を修正するのを忘れていたので、ここで慌ててセット。CR 国は今日の深夜からサマータイムに入ったので日本からは7時間遅れである。またこの売店で、長束氏にテレホンカードを買ってもらった。50Kn だから約1,100円。

ラストケの風景は家がポツンポツンと建ち、その周りを川が流れ、所々で滝になる。それぞれの色合いが絶妙にマッチし見事である。「スゴイ・スゴイ」と言っていると、「まだ序の口ですヨ」と国友さんが言う。10分ほど写真を撮って出発。ラストケを過ぎると道路脇には雪が見られるようになる。今朝、国友さんが「プリトヴィツェ地方は雪が13cmもあるそうですヨ」と言っていたが、本当に積雪の量が段々と多くなっていくように思う。



この日は当初、トンチ タディッチ先生のお話を聞くことになっていたが、都合で明日の昼になったため、11:50からレストラン POLJANA で約50分間、鱒料理の昼食をとる。プリトヴィツェ湖群国立公園へは12:00から向かう。「ここは奥入瀬と尾瀬と華巖の滝を合わせたものを何倍にもしたようなものです」と言われ、何となく納得。2時間～2時間半くらい、ゆっくりと散策のような感じで湖畔を歩く。大小16の湖と90以上もある滝などが優しく、時



に強烈に迎えてくれる様はただ美しいとしか言いようがない。本当に美しいものに言葉はいらない。雪解け水のため今は水量が多く、滝も見事だ。水煙・激しい霧状の飛沫が飛んできて近づくことができない。ツルナ川とピエラ川の2つの川が上流にあり、急流で1万年かけて石灰岩が削られ、今の形状が造られたとのことである。雪解け水ということで、どのくらいの水温かと思って手を浸けてみると、不思議なことに冷たくない。魚がいっぱい泳いでいるのがはっきり見える。

日本 なら、こんなに美しい世界遺産の中であつたとしても、湖に落ちては危険だと、多くの柵を設けたり「足元に気をつけよ」、「落石注意」などの標示があるだろうが、ここには何一つ無い。自己責任をしっかりと果たさせるのは素晴らしいことだ。

私達が大満足できるのも、先程の内戦後の悲惨な状景と比べて余りにも対照的だからだと思う。こんなにも素晴らしい世界遺産をいつまでも後世に伝えてほしい。平和はすべての政策に最優先する重要課題であると、改めて考えさせられる。平和だからこそ美しいと思えるし、そのための不断の努力が必要であり、府政の柱に平和や人権問題をしっかりと定着させなければならないと思う。

さて、私達は明日からの公式訪問に備え長東氏からこの後、次のような CR 国の生い立ちや現状の説明を受ける。

- (1) これまでユーゴスラビアはチトー大統領の下、様々な民族・言語・宗教が混在してきた。これを表すのにユーゴの数え歌として、7つの国境(イタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニア)に接し、6つの共和国(スロベニア、イロアキア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア)を持ち、5つの民族(スロベニア、クロアチア、セルビア、モンテネグロ、マケドニア)があり、4つの言語(スロベニア、クロアチア、セルビア、マケドニア)と3つの宗教(カトリック、正教会、イスラム)が存在し、2つの文字(ラテン、キリル)を用い、1つの赤い星の下に集うと言われる程に複雑な国である。
- (2) 食料は自給自足で北部地域は小麦、とうもろこし、じゃがいもなどの穀物がよく採れるが、南部地域は土地が痩せてオリーブなどが栽培されている。
- (3) 消費税は22%で、直接税は3~5%分くらい。国民性としてほとんど貯金せず、旅行をしたり、楽しく遊ぶためのお金を得るために仕事をしているという感じ。
- (4) 一般的な勤務時間は8時~16時で昼はゆっくりと休む。
- (5) ガソリンは日本よりも高く日本円にして約170円/Lで、ディーゼルの方が高い。
- (6) 日本のみずほBKグループが融資などをして2006年に高速道路が開通し、CR国では大変な喜びようだった。しかし交通事故による死者は年間800人程で、特に国外からの旅行者がよく犠牲になっている。
- (7) CR国はアドリア海に多くの島(1,185)がある。美しい自然が沢山あるのに内戦などのため観光客がほとんど来なかったが、近年著しく増えてきた。中でも日本人は

1995年 5,000泊 2001年 12,000泊 2007年 60,000泊と一気に増えてきた。国別ではドイツ、イタリア、オーストリアの順に多い。

- (8) 昨年暮れ、東京に CR 国観光局を設けたので、一気に日本人客が増えたのではないか。
- (9) 今、CR 国が大変心配しているのは、中国人街ができることだ。中国人は現在 4,000 人いるが、ただの一人も死亡しない。つまり誰かが亡くなると別の人がやってきて亡くなった人の名前で住み着くとさえ言われている。国民は共産圏の国を非常に嫌っている。日本人には好感を持っている。
- (10) 日本への輸出の 90%はマグロである。

私達はホテルへの帰途、落ち着いた郊外の風景を見ていると、家の軒先などに薪（燃料）を積んでいる家の多いことに驚く(写真・上)。今日の昼食のレストランでも薪が燃えていた。

さらに車窓から見える畑の多くが耕され、何の用意かと聞くと、ほとんどが「とうもろこし」のようである。また、こんな静かな風景の中でも写真のように、建物の壁などに今なお弾痕がそのままになっているところがあるのに気付く(写真・下)。



山林が多く、人口もそんなに多くはないので、このあたり一帯の家庭燃料はほとんど薪のようである。荒れたままにされている日本の山林のことを思うと、私達は今こそ環境対策とセットにしてエネルギー政策を見直さなければと思う。



17:45 ホテル着。19:00 にロビーで再集合することにして解散。部屋に入り。今日のことを少しメモ。19:10 からホテル内のレストランでこの国へ来て初めての落ち着いた食事。メニューは野菜サラダ・ポークカツレツでデザートにはアイスクリーム。野菜が日本で食べる以上に出てくるので本当に助かるし、新鮮で美味しい。ビールやワインも本当に美味しく楽しくいただいた。20:30 に食事を終え、部屋へ。

昨日一日は移動に時間をとられてヘトヘトになり、さらに時差の関係で十分に寝ることができなかったので、今日は 11 時には休みたいと思う。バスタブに湯を張りながら今日一日のことをメモ。長束氏からの今日のレクはこの国のことを理解するのに非常に役立った。

CR 国へ出発するまでエムオーツーリストや府の関係者から CR 国のあらましを聞いてはい

たものの、やはり「百聞は一見にしかず」である。私達が滞在しているのは首都の ZAG であり、政府庁舎や市庁舎のあるところからわずか 15~20 分程度のところである。それにもかかわらず、日本でいう娯楽施設はまったくない。いわゆるカフェやレストランなどでビールやワインなどを飲みながら、ゆったりと寛ぐという風景ばかりが目につく。

高所得でも低所得でもなく自然のままに生き、楽しみ...、そのために働くというライフスタイルがこの CR 国なのだと思う。ユーゴスラビアから独立し、ようやく独り立ちしたこの国が将来何をを目指すのかは分からないが、日本の戦後の復興の後、高度成長期以降のように「富」を求める姿がほとんど見られないという説明に驚かざるを得ない。

敬虔なクリスチャンが大半ということもあるが、平均的な月収が 10 数万円余りで普通に暮らしていけること、豊かな自然に恵まれ、ほぼ自給自足の国柄に少しうらやましいとさえ思ってしまう。この国が将来、経済成長が著しくなり、貧富の差が大きくなり という時、今のような暮らしと価値観が続くだろうか？ 町の中心から少し離れると道路脇に家がポツンポツンと建ち、その横に薪が積まれ煙突から白い煙が立ち昇る など、こんな風景の無くならないことを祈りたい。

バスタブに 6~7 分目くらいまで湯が溜まり、やっとお風呂へ。一度、事務所へ電話してみようと思うが、日本はまだ朝の 6 時頃。翌朝に掛けることにする。

ザグレブの福祉・教育 (3月31日)

6:00 起床。外はまだ暗い。今日は ZAG 市を早朝から訪問する予定のため、身支度。湯沸し器でお湯を沸かし、茶を飲んでから少しだけでも散歩しようと、ホテルを出る。今ちょうど 6:45。あたりはもう明るくなり、職場へ急ぐ人達がパラパラと見える。5~6 分も歩いていくと電車通りに出る。さすがにこのあたりは人が多い。新聞・雑誌を売る店も目立つが、と



りわけトラム(低床電車)が引っ切り無しにやってきて満員状態でまた出て行く。5 分程度、通勤ラッシュの状況をじっと見ていると、10 本のトラムが運行されている。すごいものである。だからプラットホーム(道路とほとんど段差がない)にトラムが一台もないという状態が全くなく、乗降している間にもう次のトラムが入ってくる。これらを見ながら私は、公衆電話があるのを見つけ、昨日買ったばかりのテレ

ホンカードで日本にかけてみる。0081-72-844-8888 とかけるが、コールする音や早さも国内と何一つ変わらない。通話中に液晶画面の数字が少しずつ減っていくのがよくわかるが、1分程度話しても150円程度。本当に安くかけられる。いま7:30だから日本は14:30である。

散歩からホテルに帰って朝食。今日も私の定番のコーンフレーク+牛乳、ヨーグルト、野菜サラダ(この日は特に温野菜)、玉子、ベーコン一切れ、フルーツ(すいか、オレンジ、メロン、りんご)とコーヒーである。私は海外での食事、特に朝食がバイキング方式の時は絶対と言っていいほど、肉をとらない。今日はおいしそうだったのでベーコンを一切れとってしまった。8:30にロビーに集合し、8:34バス出発。8:50にはZAG市庁舎前に到着し、早速、健康労働社会福祉課を訪ねる。

- ・ 応接者 ツボニミール・ショスタール 課長
 ビシニア・フォルトナ 副長
 ロマナ・ガリッチ 助手 他
- ・ テーマ ザグレブ市の社会福祉活動

ショスタナール課長は「ZAG市を訪問していただいたことを市長に代わって、心から感謝し、歓迎する。ZAG市は大阪に比べると小さな町だが抱える課題は共通しているものが相当あると思う。ZAG市はこの8年余りで改革への歩みを確かなものにしてきている。市長は3回連続で当選し、そのため施策はずっと継続し安定している。福祉・医療・年金などについて説明する」と挨拶。

これに対し、調査団から「戦争後そんなに年月が経っていないのに、目覚しい復興を遂げられた。ご苦労も多かったらう。とりわけ社会保障制度などについては大変だったと思う。大阪では少子高齢化が進み、保険や医療などの財源をどうするかなど、非常に苦労している。この国の首都であるZAG市の様々な施策をお聞きし、できるだけ大阪府政の推進に役立つようにしたい」と述べた。



ZAG 市からの説明と議員団からのやり取りを全て掲載すると紙面が足りないので、主なものを記載する。

- 1) 貧困家庭への対策として、国と ZAG 市との役割分担
- 2) 年金受給者の現状と予算
- 3) 高齢者・失業者などへの交通費の無料化施策
- 4) 老人ホーム・老人センター・交流センターなどの運営状況
- 5) 少子化対策としての助成措置
- 6) 介護を必要とする高齢者への方策を今後どうするのか
- 7) 医療費の市民負担はどうなっているのか
- 8) 福祉における官と民の役割分担はどうなっているのか
- 9) ドラッグやバンジードリンク対策はどうか

これらの説明や質問などの後、シヨスタール氏は「今年 10 月に ZAG 市で WHO の会議が開かれる。世界で健康都市と称する都市は 30 あり、ZAG 市もその一つだ。この会議には世界の主要都市の市長らが来る。また、ノーベル平和賞のアルゴール氏もお見えになる。大阪市へも案内を出すので是非お越しいただきたい」と述べられた。貴重な時間を割いていただいた同氏は、脳外科の著名な現役のドクターとのこと。今後のご活躍を祈る。ただ、余りにも公共施設を建設するのに驚いてしまう。

次いで私達は、別棟の教育文化スポーツ課を訪問した。

- | | | |
|-------|--------------------|-------------------|
| ・ 応接者 | ファイナンシャルマネージャー | ズリンコ・ネムリナ氏 |
| | 青少年担当ヘッドアシスタント | ボジツア・シムレシャ氏 |
| | 教育課長 | シリラーナ・ベルスラビッチ氏 |
| | スポーツ担当 | ターニア・アリシッチ氏 他 3 人 |
| ・ テーマ | 青少年の教育・スポーツなどへの支援策 | |



ZAG 市の訪問にあたって議員団から記念品を渡し、「今日は大変お世話になる。事前に調査

項目をお知らせしているがよろしく」と挨拶。

ZAG 市からはボジツア・シムレシャ氏が「今日は市長が出席できず申し訳ない。代表して心から歓迎する。ZAG 市は人口約 80 万人だが周囲も含めると 100 万人くらいになる。ZAG 市に 17 の区を置き、コントロールしている。また小中学校は区別がなく、8 年間の一貫教育を進めている。119 学校で 69,000 人が学んでいる。また幼稚園は 59 (民間でさらに 40、宗教民族関係で別に 5) 高校は (15 才~18 才まで) 77 あり、4 万人が学んでいる。さらにチルドレンハウスという、地方などから来た人達用の全寮制の学校を 15 運営している。財政的な問題、教育プログラム、学校と地域のスポーツについては担当者から説明する」と挨拶された。

先程と同様にそのあらまは

幼稚園、小中学校、高校の現状

教育費の費用負担で国と ZAG 市の割合

給食・教科書などの費用と負担

放課後教育 (日本の学童保育) のあり方

授業の二部制

メディア教育、交換入学、クラス編成

奨学金制度

学校と地域でのスポーツ活動と体育協会など

いじめ、不登校などの実態

最近の子どもの体力

高校のコースとして、普通、工業、商業などはどうなっているのか

など、テーマ毎に詳細に述べられた。

これらの説明と議員団からの質問を通じ、私達は CR 国の教育施策は過度にカバーするのではなく、地域の人たちと協力しながら、特にスポーツを通じ健全な育成を目指していることがよく分かる。

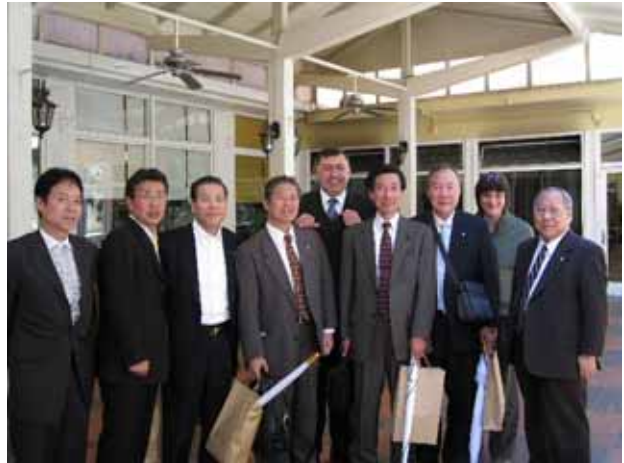
また、私の質問で、「いじめ」はやはり CR 国にもあるが、「不登校」の子どもはいないとのこと。全くないということではないが、教員が家庭を訪れきっちりと説明し登校を促している。また不登校が続くとその親が罰せられるとのことである。

さらに、2008 年 2 月 1 日をもって徴兵制を廃止 (昔は 6 ヶ月) したとの説明があった。これらの説明や質問が 12:20 に終了し、教育文化スポーツ課を辞したが、ズリンコ・ネムリナ氏らから記念品として、青・赤それぞれの T シャツを 1 枚ずつと傘をプレゼントされた。私達は日本から持っていった「浮世絵の飾り扇子」だけのプレゼントなのにと、申し訳ない思いである。

予定 の時間を少しオーバーしてしまったため、私達は急いでトンチ タディッチ氏との懇談会場のレストラン VINODOL へ徒歩で向かった。同氏はかつて、大阪府池田市にある「通商産業省 工業技術院 大阪工業技術研究所の材料物理部 量子ビーム研究室に在籍された理学博士である。同氏は帰国後、日本の優れた工業製品のように自国のレベルを

上げる努力をされるとともに、国会議員になられ2期8年を務められた。もちろん、日本語も相当なもの。同氏は私達が日本を出発する少し前に、懇談できるとの連絡をいただいていたので、どんな方かと思っていたが、気軽に対応していただいた。

同氏は日本での暮らしや思いを語られるとともに、CR 国の政治制度や現在の政党の動きなどを説明された。CR 国は完全比例代表制で全国を 10 ブロックに分け、ドント式で議席を決めていくとのこと。有権者は党名を書くが、無所属候補の場合は個人名を記載する。任期中に政党が変わったりしても議席は守られるとのこと。同氏は 2007 年の前回選挙で落選されたが、2011 年に予定される総選挙で是非当選したいと強い決意を語られた。



同氏との懇談では、日本へのマグロの輸出とそのための養殖で海水の汚染などが一時問題になったこと、エネルギー政策としての天然ガスのパイプライン計画、情報インフラ整備についての法案整備などを中心に、熱心に語られた。食事をとりながらの懇談・意見交換は 14 時ごろまで和やかに行われ、議員団から用意してきた記念品(扇子)をお送りし、最後に全員が記念撮影をして終了した。同氏とのコンタクトをとっていただいた、在クロアチア日本大使館の外交官と長束氏に心から感謝申し上げます。



この日の昼食は ZAG で名物と言われるロールキャベツだったが、私には味付けが、とりわけ塩味が濃すぎて半分ほど残してしまった。

私達は長束氏や ZAG 市関係者から、「視察の際、市内の主要な施設、国会議事堂や政府庁舎、



市議会議事堂や政府庁舎、市議会議事堂、各国大使館などの公的施設とともに、大聖堂や聖マルコ教会などをご覧いただくと、CR 国と ZAG 市がよく理解できるし、国民の暮らしや習慣を理解いただくのに役立つ」と言われていたのでこの後、市内の主要施設を視察した。ガイドに Miss アナが付き、グラデッツ地区でバスを降り、まず、聖マルコ教会を訪れた。屋根に写真のように群青色と赤茶色のタイルで ZAG 市の紋章と、クロアチア・ダル

マチア・スラボニア王国の紋章が美しく輝いている。

私達が驚いたのは、すぐ近くに政府庁舎や国会議事堂があるのに、警備がほとんどされていないことである。「ここに並んでいるのは国会議員が乗ってきた車ですよ」と説明され「エーッ」と思う。改めて国民性・文化の違いを感じる。このような説明と見学こそ、本当に価値がある。

続いて、石の門へ。ここは18世紀に木造から石造りにされ、現在まで残されているが、1731年の大火の際、城門が焼け落ちた時に門の内部にあった聖母マリアの肖像が無傷で残ったという。そのことから、当時のままの肖像が収められている礼拝堂前で、ロウソクや花を捧げてお祈りする人が絶えないとのこと。私も早速、ロウソクを求めてお祈りした（ロウソクは1.5Kn）。その後 ZAG のシンボルの大聖堂に入り、ルネッサンス様式とバロック様式の混在する



内部を見学し、祭壇前で10\$寄進した。神聖な静かさの中、ステンドグラスが実に美しかった。さらに古い大砲が置かれたロトルシャチャク塔、フニクラのケーブル、イエズス会の聖カタリナ教会なども見学した。

私達がイエラチッチ広場（共和国広場）を見てホテルへ着いたのは16:20である。移動中の時間を含めても2時間足らずの短い市内視察だったが何か少しCR国を理解できたような気がする。今日でZAGは終わって明日は次のスプリット（以下SPL）へ移動するので、早めに荷物整理をして欲しいと国友さんが言う。国内線であっても手荷物などは国際線と同様の検査を受けることになるので、電池やバッテリーもトランクに入れず手荷物にするように...など、明日

のことを詳しく注意。さらに、府庁の控室から送られてきたFax（新聞の府政に関する重要記事の切抜き）のコピーを預かる。日本の文字を見るのは何か久しぶりという気さえする。

部屋 に入るとベッド横の小テーブルの上に、クリーニングに出しておいたカッターシャツが置かれている。私はクローゼットに吊るしておいたスーツなどを取出してトランクに仕舞うとともに、ZAG市からいただいた資料などを整理した。トランクには今夜使うパジャマやスリッパ、洗面用具、湯沸し器などを入れておくわけにはいかず、ある程度の片付けで終了し、今日の出来事を少しメモする。この日の夕食はホテルではなく、外に出て行くことになっていて18:30集合だ。まだ少し時間があるがお風呂に浸かってゆっくりという程の時間もないので、小説の続きを読む。

専用バスは18:40に出発し、レストランZLATNIMEDOは午後ZAG市内の視察で見た近所であり、ここで野菜サラダ・スープ・子牛の肉料理+ポテト等をいただく。味は昼と同様に非常

に濃いため、少し残念だ。この国の人はいつもこんな辛口・濃味で大丈夫なのだろうか。肉は釜で蒸すようにして調理されているので少しスカスカの感じだが、油分は相当に抜けていて食べやすいのだから、もう少し薄味であればいいのになあと思う。20:10 に終了し、ホテルへ帰る。

ホテルに帰ると国友さんが明日のスケジュールメモを渡す。明日は ZAG から SPL へ移動するが、飛行機の出発時刻が比較的ゆっくりとしているため、ありがたい。8:00 モーニングコール、9:00 荷物回収、10:00 出発予定である。

少し CR 時間に慣れてきたとは言ってもまだ少し体がダルイ。部屋へ帰ってゆっくりと風呂に入って寛ごうとするが、どうもこのホテルは馴染めない。当初の計画ではホテルを市内中心部のヒルトンに決めていたが、政務調査費の旅費の支出基準の内、宿泊費等(1泊2食)の上限が定められている関係でグレードを落としたことと、従業員のマナーの悪さで満足感がない。結局ここで3連泊したわけだが、もし、次回この ZAG を訪問する機会があっても、余程のことがない限りここを選ばないと思う。

ザグレブで気づいたこと

< 1 > ترامの充実はずばらしい

以前に訪れたフランスのストラスブールと同様に ZAG も中心部はトラムが走り、多くの利用者が満員だ。16 系列あり、CR 国の色である青が基調。道路からの段差もなく、ノンステップの電車が縦横に走る様はずばらしい。時々赤いボディーのトラムもあるがこれは3段のステップがついている。チケットはキオスクで 8 Kn、乗車の際に購入すると 10Kn で 90 分間乗り放題になっている。しかし、やはりこの国にも無賃乗車をする不心得な人がいるようで、それが見つかり、4 ~ 5 倍の罰金を取られるようである。

ストラスブールでは完全に都心へ入ってくる車を締め出していたが、ここでは締め出しはしていないので、車も数多く走っており、都市計画の上ではまだまだのように思う。

< 2 > ゴミと駐車問題

CR 国へ来て感心するのは「ゴミ」が路上にほとんどないということである。ZAG の市民のモラルも大きく影響していると思うが、写真のように歩道上にゴミ箱を積んで走る車もある。路上駐車は本当に多く、イタリアなどの隣接国と変わらない。



< 3 > 落書きがヒドイ

ゴミがなく、ずばらしい国だと思っていると、何と大切な建築物に日本で見られるような落書きがいっぱいある。そして不思議なことに、日



本で見る落書きと実によく似た「字体」なのである。落書きする者同士が申し合わせたとは思えないのに、なぜか同じである。

< 4 > 物乞い

どこの国へ行ってもいわゆる物乞いに会う。ZAG の中心地の大聖堂前を歩いている時に何人かが「プリーズ！」と言って受皿のようなものを目の前に出す。国友さんが「スリですよ」と注意す

るし、私達も全員が「ノー」と言うと、「 」と何の意味か分からないが捨てゼリフのようなことを叫んで別の人の方へ行く。

しかし、フランスやスペインなどで出会った人達のように、見るからに酷いというような服装ではない。そして大聖堂前を離れるともう見られない。

< 5 > 食事のボリューム

ヨーロッパの街の特徴であるが、ここ ZAG も街中いたるところに（道路脇、広場など）レストラン・カフェのテーブル、椅子が置かれ、多くの人達で賑わっている。そしてこんな時になると言う時間帯に、年齢層も若者から老人まで多彩である。組み合わせも家族、友人、恋人など様々であるが、驚くのはそのボリューム。スパゲッティやリゾットなど、どれをみても、日本のレストランで出される量の2倍くらいはあると思う程のボリューム。それを20才前後の若い女性がしっかりと食べている。通行しながらパクついているハンバーガーのようなものでも、私達が時々口にするマックの2～3倍はあるかな？というくらいにデカイ。

< 6 > 高校生のタバコ

ZAG では高校生の多くが喫煙している。大聖堂を訪れた際、集団で来ていた高校生の多くがタバコを吸っている。そして、女子生徒にそれが多い。当然、タバコは禁止されているが、他に遊びもなくこの程度はまだまだマシとのこと。教師も見ているが注意さえしない。

< 7 > 消火栓は一杯 でもポストはどこにある？



不思議なことに ZAG 市内では一つも郵便ポストを見かけない。どこの国でも郵便ポストは必ず目にするものだ。日本のように赤色とは限らず、ウズベキスタンでは青色だったが、色や形は違っても、町の中を移動していると必ず目にするものであるのに、ZAG にはない。散歩しながら2日目の朝は注意深く探してみたがやはりなかった。そのかわり青色の消火栓がいたるところに用意されている。水が豊富にあるという証明だが、ポストは一体どこに？

< 8 > 箱物の維持管理

CR 国はサッカーとともにハンドボール、水球がすごく人気のあるスポーツのようで、今、ハンドボール大会を開催するための大きな競技場を建設中である。しかし、ほんの一時の大会が終われば、その後の維持管理などはどうするのか？と、ZAG 市の市民は不安に思っているとのこと。我が国でもオリンピック施設などがその後の維持管理に多額の費用を要して頭が痛いと同じことが、この国でも生じていることに「どこもよく似ているな」と思う。

< 9 > ザグレブのホテル考

私は国内でも海外でも、ホテルに泊まる際は必ずバスタブに一杯お湯を張り、一晩中湯を流さずそのままにしておく。そうすると部屋の乾燥を防ぐことができるし、万が一火災などがあってもシーツを水に浸け、それを被って難を避けることができるからである。

国内のホテルや排水事情のよいホテルは朝方に栓を抜いて空っぽにするが、「ZAG では一気に水を流すと逆流してカーペットを濡らすことがよくあるので、チョロチョロと流してください」と言われたため、排水はルームキーパーにまかせることにした。ところが視察を終えて帰ってみると、バスタブの底などには髪の毛や石鹸の泡などがそのまま残り、ただ水を流しただけ。2日目の朝などはまだ部屋にいるのに「メイクアップ？ クリーンOK？」などと言って入ってくる。コンセントも部屋に入ったドアのところに1つあるだけ(これはルームメイクの際、掃除機を使うためのものだと思う)。洗面所に1つだけあるコンセントも Shaver Only と書かれ、湯沸し器などを使えない。A 議員にいたっては、トイレに入っている時、「待て」と言っているのに勝手に入ってこられたという。従業員のマナーや教育はどうしているのだろうかと思う。

政務調査費のホテルの料金設定で、甲地・乙地などのいろいろな決め方はあるにしても、まもなく EU に加盟しようとする国の首都のホテルで、パリやロンドンのように数多くのホテルが有るところの約 80% の宿泊費が基準というのは無理なことだ。

スプリット市を訪ねる (4月1日)

この日は SPL 市へ向かう飛行機の都合で割合ゆっくりとしたスタートであるが、2:30 ~ 3:00 頃に目が覚めた。バスタブに湯を張っているのにどうも喉がおかしい。ミネラルウォーターの栓を開けて喉を潤し、用意してきた濡れマスクをしてもう一度休むと 6:00 までゆっくりと眠れた。

荷物を片付けて 1F のレストランへ行くと一人の議員もいない。日本人と思われる団体客が 5 ~ 6 人ずつ固まって 3 テーブルを使っている。私は空いた 1 つのテーブルに座って食事を始めると、70 才くらいの夫婦 1 組と同年代の女性 1 人の 3 人がやってきて、「座る席がない」と困っているの、「どうぞ」と言うと隣へ。男性が私を見て「議員のバッチか？」と言うので「そうだ、視察だ」と答えると、視察目的は何かなどいろいろな問いかけてくる。この人達は今日、日本へ帰るらしい。ドブログニク ポスニアヘルツェゴビナ マケドニア

スプリット スロベニア プリトヴィツェを回って、昨日 ZAG に着いたようである。この人達は「旧ユーゴの内戦の悲惨さをガイドから聞き、激しかった戦闘地域の跡も見てきたが、すべて時の政治家の判断だ。政治の責任は思い。大阪へ帰られたら頑張ってください」と語られた。8:45 私はいつもの定番の食事をとって部屋へ。9:00 バグゲージダウン、9:30 チェックアウト、10:00 出発である。

ただ、ホテルはなぜこうも高いのだろうか。カッターのクリーニングは 35Kn (= 770 円)、ミネラルウォーター15Kn (= 330 円) だし、部屋に置かれていた料金表では、部屋代が 175 \$、220 \$、260 \$ などの価格が書かれていた。私の泊まった部屋がどのランクかは分からないが、この国の平均的な所得から考えると余りにも高いと思う。

10:20 ZAG 国際空港に着いた私達は、トランクなどを預けて 2F のレストランへ。アメリカのブッシュ大統領が 4 日に ZAG に来るということで、大変な警備体制を布いている。CR エアラインの O U 654 便は 12:00 搭乗開始、12:30 発が、約 10 分遅れで SPL へ向かう。私の席は 9B である。約 40 分の飛行で 13:20 に SPL 空港に到着。SPL 空港は本当に小さな地方空港で、荷物も 5 分くらいで出てくる。ここで、この日からの新たなバスに乗って昼食に向かう。

車中 で長東氏は SPL のあらましを説明。ここの産業の中心は造船業で島が数多くある一方、山は 2,000m 級の石灰岩の山が大半で、そのため中腹以上では樹木が育たず、オリーブやぶどう、アーモンドなどが麓の方に多く見られるという。

SPL はダルマチア地方に属し、現在は失業率が非常に高いが、スポーツは ZAG 以上に盛んであるようだ。ZAG からは紀勢線のような振り式電車が通っているが、約 5 時間 30 分を要し便数も限られているため、移動はほとんど車のようである。またここはホテル事情が非常に悪く、安いホテルもあるが治安上勧められないとのこと。私達の予定ホテルは絶対に大丈夫とのことである。

私達が訪問するスプリット・ダルマチア県(以下、SD 県)の庁舎まではそんなに時間がかからないようだが、車窓から時々見える海岸線は実に美しい。30 分ほどでレストラン SUMICA に到着。14:00 を少しまわっている。海岸縁に建っているのも、10 分ほど目の前の美しい景色を堪能。のんびりと「魚釣り」をしている人が何人か見られるが、水は澄み切っていて「魚からも釣っている人が丸見え」なのに釣れるのかなと思う。

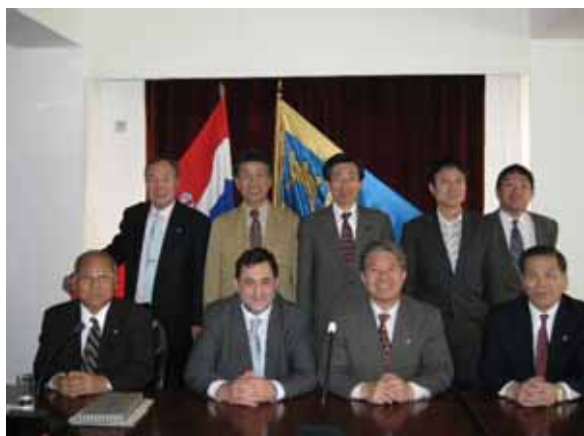
昼食のメニューはスープ、海の幸リゾット、フルーツサラダと聞かされていたが、このリゾットだけはいただけない。米の表面はお粥のような感じで軟らかいが、表面だけが軟らかく、中は芯がそのまま噛むと歯にひっつくし硬すぎる。味はシーフード風味で結構いけるのに残念だ。苦勞して何度も何度もしっかりと噛んでほとんどを食べたが、消化不良で胃腸を壊さないかなと少し心配である。



食事を終えた私達は、SD 県の経済開発復興課を訪ねる。

- ・ 応接者 県経済開発復興課長 ボッツオ・シンチッチ氏
- ・ テーマ 企業誘致と活性化について

私達を迎えてくれたシンチッチ氏は「海外から企業・人が来て投資をしてくれること、とりわけ発展の著しい日本には誰もが好感を持っている。SPL 大の教授達や企業の代表者も日本を訪問して造船技術をいろいろと学んだ。私からは SD 県の産業と企業誘致などについてお話しする」と挨拶され、具体的は施策の説明をされた。主な説明は以下のとおり。



- (1) この県は CR 国で面積が最も大きく、人口は第 2 位
- (2) 約 50 年間、社会主義の厳しい時代を経て今、市場経済化へうまく適応できている
- (3) 産業の中心は建材、造船、航海業、建築業
- (4) CR 国には 6 つの経済地区があり、SD 県を経済特区として認めている
- (5) ホテルが弱かったが、やっと 4 つ星クラスの建設が始まった
- (6) 農業も観光も密接に関わっている。よいワインは海外へも出している
- (7) 土地はまだかなり国のものだ。今あるホテルの 10 ヶ所は公売にかけられる
- (8) 環境保全に努めないと観光事業も伸びない。ごみ焼却場をまもなく建設予定で、そのため日本にも専門家を派遣して勉強させている
- (9) 水は豊かで水力発電が中心だが、将来的には太陽光発電をもっと広げたい。
- (10) ファイナンス面では 95 銀行中、海外資本は 93 だ
- (11) 外貨獲得に大きな役割を果たしているのに航海士がいる。これまで、SPL 市から数十万人が世界へ出かけ、母国に外貨を運んでいる
- (12) 海外からの投資も徐々に増えているが、是非日本企業にも進出して欲しい
議員団からは
 - (1) 天然ガスの経路はどうなっているのか。また、このことによってエネルギー供給が他国の政策によって影響を受けないか
 - (2) 造船、ごみ焼却場などはどういう調査を行っているのか
 - (3) 経済特区の範囲と業種はどの程度の広さか
 - (4) マグロの養殖のことを聞いているが、いつ頃からか。またそれによる環境汚染、財政

的支援はどうなっているか

(5) 企業誘致のための具体策として、どういう方策を講じているのか

(6) 最近日本企業からのコンタクトはあったか

などを質問する。また、私が取り上げた企業誘致の具体策としては、投資額が多いほど優遇するとのことで、

800万€以上の投資額 法人税を10年間無料

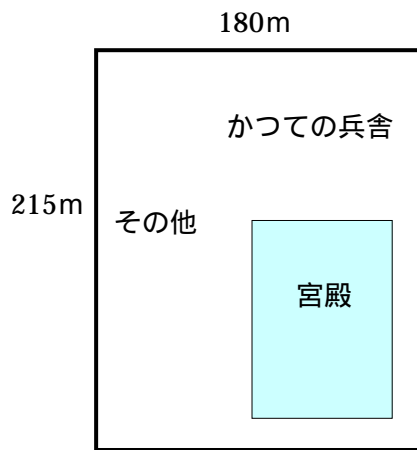
ただし75人以上の雇用を条件

400万€以上であれば 法人税の1/2を減額

ただし20人以上の雇用を条件

この県の日本への輸出は70億円で、その内90%はマグロのようだ。

17:10に終了し、17:15バス乗車で近くの海岸リバ(海岸のプロムナード)へ向かう。ここはローマ帝国のディオクレティアヌス皇帝(245~316年)の宮殿が置かれたところで、今もその威容を垣間見ることができる。かつては広大な敷地であったようであるが宮殿の部分以外



外は家が立ち並んでいる。また、かつての宮殿と言われる部分にも一部、住居がある。約1時間のフリータイムの中、小さな店舗が軒を連ねる細い路地を散策し、18:45に集合。ところで私たちは、ここで去年にSPL市長が辞任せざるをえなくなった「事件」の現場へ案内してもらった。海岸プロムナードは多くの店が建ち並び、飲食店やブティックなどが繁栄していたが、辞任した市長が観光のため、地元の発展のためと、路面をピカピカにやりかえ、さらに大きなアーム状の庇を作りその下に多くの店を入れたという。

ここを見学した私達が共通して感じたのは、なぜこんな美しい海岸沿いの昔ながらの風景を壊すような工事を市長がやったのだろうかということである。広い海岸道路などには多くの店が並び、客も多く入って互いに繁盛しているのに、市長がもっと美しく、もっと客を増



やすという理由で、大規模工事を実施し、新しい近代的な店舗エリアを設け、新たにテナントを配したようである。ところがピカピカし

た路面（生コン）は雨が降ると滑り、さらに隙間に女性がピンヒールを引っ掛けるなどの苦情が寄せられるとともに、新しくできた店舗は当然、出店料（場所代）が高く、そのために飲食代やブティックの品物も 50% くらい高くなった。その結果、客足は途絶え、テナントは撤退し、抗議の声で市長は辞任に追い込まれたとのこと。民意に反する行政はどここの地でも同じことが起きるのだなと改めて感じる。



私が「この国の郵便ポストは一体どこにあるのか」と言っていたが、ついにこのプロムナードでポストを見つけた。黄色の箱型で、壁に付けられた形式であるが、何かホッとした気がする。

19:00 からの夕食は、レストラン VAROS でスープ、ローストチキンなどの料理。20:30 に終わってバスに再び乗車してホテルへ向かう。ホテル（スプリット・メリディアン）到着は 20:50 になっている。国友さんが、「明日は 6:30 にモーニングコールで、7:00 荷物回収」のメモを渡す。明日は SPL からドプロブニク（以下、DBV）へ専用バスで移動するが、約 5 時間近くかかるとのこと。

私の部屋は 667 号室。部屋に入ると ZAG のホテルとは大違い。SPL は国内からの旅行者も結構多いのにホテル事情が悪く、「安全性を考慮するとここしかない」ということだただけに、どんなところかと思っていたが、心配は要らない。スリッパも用意され、コンセントも十分にある。セーフティーボックスも使いやすいが、こんないいホテルにたった一泊だけというのは「残念」な気がするが、観光で来た訳ではないので仕方が無い。

バスタブに湯を張って久しぶりにゆったりと長く浸かった気がする。湯を沸かし緑茶を飲んで少し新聞を読む。他の議員は TV 番組が　と言っていたが、私は国内でも海外でも、ホテルに泊まってまず TV を見ることはない。府庁から届いた FAX が 20 枚程あるので、これを読んでいると 1 時間くらいすぐに経ってしまう。

ダルマチア地方を訪ねる（4月2日 朝）

昨夜は 11:30 に寝ることができたので体がスッキリしている。6 時前に目が覚め、早速荷物の整理。日本から持ってきたポットにお茶を入れるため、湯を沸かしている間に昨夜のパジャマなどを片付け、出発の用意。ドアの外にトランクを出し、お茶を飲みながら昨夜の新聞切抜きの続きを読む。7:20 になり 1 F のレストランへ朝食に向かう。ここは ZAG のホテルとは雲泥の差で、メニューも豊富だしコックもいる。私はコックに「玉子 2 つでオムレツを作って欲しい」と片言の英語で頼み、大きなゴーダチーズとカマンベールチーズをナイフでカット。さらに温野菜が綺麗に並んでいるので中位のトマト丸ごと、ナス、ピーマンを 2 ~ 3 切れずつ取った。これにお決まりのシリアル + 牛乳、フルーツ（すいか、オレンジ、マンゴー、パイナップル）、ヨーグルト、コーヒー。少し食べすぎくらいだが、肉類を食べないので直ぐにお腹が減る。30 分余りで食事を終え、部屋へ帰って再チェック。8:00 出発で今日は長いバ

スの旅が続く。

私達は真っ直ぐに南下し、CR 国南部の DBV へ向かう。バスの右側は海岸が続く(写真・右上)が、これをダルマチア式海岸と呼ぶ。この地域の名前がそのまま学名になったとのこと。二つの大陸プレートが押し合って隆起し、今の島・陸が出来上がったという。

長束氏は出発後、これから 5 時間近くも乗車するので、CR 国のことなどをまた説明するとって次のようなことを車中で語った。

- (1) SPL は美しい海岸線を自慢にするほど素晴らしいが、かつて化学工場ができ、工場の垂れ流した汚水によって海水が汚染され「名物」とまで言われたウニがほとんど採れなくなってしまった。しかし、数年前にこの工場(写真・右下)が倒産したため、またウニが見られるようになってきた。私も日本で、工場排水と河川や海の汚染は勉強したが、この国でも同じことがやっぱりある。ただ、この化学工場であった所が近くホテルになるとのことだが、そのホテルがきっちりとした対策を講じないと前と同じようになってしまう。



- (2) 海外、とりわけ日本へのマグロの輸出が SPL では大きな利益を上げている。しかし、そのため SPL ではマグロが高騰してしまった。60Kn/Kg くらいだったのが、いまでは 150 Kn/Kg で、庶民はなかなか口に入らない。しかし日本には大変感謝している。中国には今後も絶対売りたいとのこと。
- (3) CR 国ではどこへ行っても、エニシダ(金省杖)があり、特にこの SPL ではよく黄色い花を見かける。英語では a common broom というが、古代にギリシア人がこの地に来た時、エニシダが美しく咲いた姿を見てギリシアの言葉で「アスパラトス」と言ったことが、スパラト「スプリット」と呼ばれる元になったらしい。
- (4) この国で肉は日本のように牛肉が最高級ではなく、最も高額なのが羊で次いで、牛・豚・鳥の順になる。羊はイースターや結婚式など限られた時にしか口にできないようである。その中でも釜焼きと呼ばれる料理法が一番高級なもの。日本とは大違いだ。
- (5) SPL は美しい海岸線が観光資源になっていることもあり、民宿が非常に多い。正規に届出したところと無届で開業したところとで、よくトラブルが発生する。海岸沿いに美しい松林があり、そこに民宿を作り儲けるために客引きをする。時に TV が入ってこれを放映することもあるようで、そんな時はカメラに何かを投げつけたりすること

もあるようだ。マカルカス地方ではよくそんなことがある。

(6) また、進路の左側車窓からは殺風景な景色が時々出てくるが、これは山火事の跡で、これらの場所はほとんど葡萄畑やオリーブ畑になっていく。まだ背の低いオリーブなどが見られる場合は、最近の山火事跡に植えられたものだ。

8:45 にトイレ休憩。ここのトイレは有料で 2 Kn 必要。今まで、ここへ来た客はこのレストランと雑貨店に入ってもお金を落とさずに、トイレだけで帰ってしまうため、数年前から専属の人を置いて管理するようになったらしい。当然、トイレは綺麗に清掃されている。10 分程度の休憩で直ぐ出発。バスが走り出すと、少し霞んでいる前方に大きな島が見てくる。これが、一昨日の昼に懇談したトンチ タディッチ氏の出身地のフバル島である。この島はセレブの来る世界 10 大リゾート地選ばれたらしい。9:25 バスを止める。ここは海岸の美しいところでエニシダ、アーモンド、桜などが美しく咲いている。オリーブも青々としている。このあたりのオリーブは食用に 5%、油に 95%使われるようで、油に絞ったカスはほとんどが石鹸や肥料になるという。

私は「スペインではオリーブの収穫は大変な労力を要するため、その仕事の大半は海外からの出稼ぎ労働者が担っているが、CR 国はどうか」と尋ねると、ここではすべて自前でやっているとのこと。9:35 バスに乗車して一路、南の DBV へ。まだまだダルマチア地方の旅と長束氏の話は続く。

CR 国にとっての一大危機として、かつて早魃問題があった。この早魃のため、当時、多くの人達が海外へ移っていった。その数は約 100 万人にもなり、ドイツ、アメリカ、南米などが多い。早魃が終わり、国状が落ち着いた後も海外へ移る人は後を絶たず、今では約 450 万人が海外で暮らしているが、この人達の母国への想いは強く、CR 国ではそれに応え移民基金を作って、母国の文化を伝えている。海外へ散ったユダヤ人のことを「ディアスポラ」と呼ぶが、それをこの人達にも同じように呼んでいる。

しかし、移民でお金を貯め、母国へ帰って家を建てたりする人達には、「あいつは金のために国を捨てて出て行き、今頃平気な顔をして戻ってきた」と言う人も多く、かつての仲間や



近隣の人達とのつきあいが上手くいかずに苦勞しているようである。さらに最近では、母国へ帰りたいたと思っても、その国で生まれ、10~20 年住んでいる子ども達は、そこを故郷と思いこんでいるし、人間関係もできるため母国へ帰る人達は減ってきているという。

私達の車はもともと、アドリア海沿いの美しい海岸道路を南下する予定だったが、緊急の道路工事があるために迂回して欲しいということで、山の中の道路を走っている。この道路は急傾斜地に造られているので切り立った崖が

車窓から見える。

少し時間が経つと、険しい風景も和らいで村落が出てくる。平地や農地も見られる。ポツンポツンと見えていた家が急に数が増えるがそれも1～2分で終わり、また家がポツンという姿に戻る。周囲は葡萄、さくらんぼなどの樹木に変わる。

10:10 長束氏が「まもなく左側がボスニアヘルツェゴビナ（以下、BH国）と接するところで、そこにBH国の国旗が揚がっていますよ」と説明。この国は今400万人余りの人口らしいが、あの内戦で210万人の難民、24万人の死者を出したことや、かつてトルコに支配されていたこともあり、イスラム教徒が非常に多いと語る。またこの地域は内戦終了後、独立の際にCR国に組入れたかったようであるが、国際的に受け入れられず今日のようならしい。またこの場所（メジュゴリエ）は、世界3大マリア出現の地といわれる一つで、他にポルトガルのファティマ、フランスのルルドがあるという。

それから暫くの間、左側に湿地帯を見て車を進めていると、左に国境の検問所が見える。スパイ扱いされるのでカメラは絶対に向けないでとのこと。

ところで私達は2時間以上も走っているのに、ただの一つもガソリンスタンドのないことに気付く。A議員が「このあたりの人はどこで燃料補給をするのか？」と言うとおり、私も不思議に思う。トラック、タンクローリーなどがかなり走っているのに、どうしているのか？と心配だ。

10:35 周囲はずっと湿地帯である。長束氏は「ネトバ川の河口では豊かな水を利用して果樹園が広がり、温州みかんやいちじくが多く栽培されているので見て欲しい。また蛙も多



く、この付近では蛙の入りゾットもよく出される」と言う。10:40になると畑、農地がかなり見られるようになる。また、BH～ブカレストへの鉄道も見えてくる。ようやく私達は町の中に入ってきたようで、スーパーマーケットも見つけた。ここはネトコビッチという町でハンドボールが非常に強い地域らしい。

11:00 ついに私達が心配していたガソリンスタンドが一軒出てきた。そして周囲はすごいみかん畑で、道路脇で「みかん・乾燥いちじく」などを売っている露店が多くみられるようになってくる。11:13 右にペリエシャツ半島が大きく見えてくる。この半島では赤ワインの最高級品といわれるリングッチ（3,000円程度）が作られ、牡蠣、ムール貝の養殖が盛んだという。11:18 CR国とBH国の国境検問所（写真）が出てきて、ストップ。

国境では普通ならパスポートを見せて...ということになると思うが、10秒程度の会話をしただけで出発。後で聞くと、このバスはどこへ行くのか？中には誰が乗っているのか？と聞くだけだとか。大体どの車にもそのようなことだけを聞くようである。



国境を越えてすぐにスーパーマーケット(日本のコンビニとスーパーの間くらい)が出てきたので、ここで小休止。私はここでチョコレートとローズティを購入した。長東氏の話では、ここはデューティフリーとなっていたが、4ヶ月前から課税されるようになったとのこと。しかし、普通なら22%の消費税が17%で、5%分だけ安くなっている。

さて、私達は30分程、トイレ休憩と買物をして出発。

12:00にまた国境を越えてCR国に再入国したことになる。車窓からはペリエシャツ半島がよく見える。長東氏は「半島の端っこは小山のようにになっているが、その中腹をよく見て欲しい。一本の曲がりくねった道路のようなものが見える。これは万里の長城と同じもので、外敵に備えて築かれた城壁で、ストーンの長城と呼んでいる。長さは5.5Kmもあり14世紀当時のヴェネチアからの攻撃を防ごうとした」と説明。ヨーロッパでは最長で、万里の長城に次いで、世界で2番目の長さという(しかし、帰国してもう一度このことを調べてみると、イギリスにあるハドリアヌスの城壁に次いでヨーロッパで第2位の長さ)。保存状態はかなり良く、山の稜線に沿って、どこまでも続いているように見える。また、半島の付け根にある町ストーンは、DBV自治区内の第2の人口だそうである。12:30に私達はトルステークという町に入る。右側には相変わらず美しい海が臨める。またここには外洋から帰ってきた船員が植えたとされる「巨大なプラタナス」の木が2本そびえている。

DBVは観光で成り立っている町で、人口は約5万人。しかし、観光業などに従事している人が2万人近くいるため、常時7万人近い人がここにいる。CR国の中では最も観光地として栄えているが、そのために他都市に比べると物価はかなり高いとのことである。またここは、イタリアはじめ多くの国々に宗主権を認めて貢物をする、「外交政策」で自治を守るという基本方針を貫いてきた。ローマ帝国、ビザンツ帝国、ヴェネチア、トルコ、ハンガリー...と、その時々状況を詳細に分析し、19世紀初めにナポレオン軍に服従するまで「黄金は売っても自由を売るべからず」と叫び続けたようである。

またそのため自ら城壁を築き、今でも2Km程の立派な当時のものが残り、その上を歩くこともできるようだ。

12:40 標識に、DBVへあと6Kmと書いてある。バイオリン奏者として著名な日本の五嶋みどりさんは3年に1回は必ずここを訪れ、コンサートに参加しているという。

1979年に世界遺産の発録が始まった第1回目の分に、CR国の3つ(プリトヴィツェ・スプリット・ドロブニク)が自然遺産として認められ、それ以後国をあげて観光客誘致に力を入れているとのこと。しかし、最近このあたりの若者(特に高校生くらい)のマナーが悪く、長東氏もつい最近からまれたようである。

ドロブニクを訪問 (4月2日 午後)

13:04 長いバス移動で、やっとCR国南部の都市 ドロブニク・ネレトバ県(以下、DN



県)の DBV に到着。海岸には多くのクルーザーが停泊している。私達は早速、レストラン・PROTO で昼食。メニューは名物のムール貝の酒蒸し、サラダなどで、美味しくいただいた。1 時間程度で休憩をかねた昼食を終え、ガイドの MS カテリーナの案内でまず、県庁舎・市庁舎が併設されている DN 県(写真の左半分が庁舎)を訪問した。

ここでは、県 No. 2 のイボ カラマティク副知事に挨拶。同副知事は多忙なため、互いの挨拶を終えて退出され、国際交流アドバイザーのイーダ ガムリン氏が DN 県の概要説明と日本との交流を深めたいと述べられた。

今回は特に、「日本の第二の都市であり、CR 国の全人口の 2 倍もの人口を持つ大阪府の議員の訪問はこの上なく嬉しい。海外から時々議員が DN 県を訪問するが、日本からは始めてだ。CR 国と DN 県の PR をぜひお願いしたい」と語られた。

同氏は、CR 国の人口は 450 万人で、全国を 20 県・1 特別市に分割、DN 県は 16 万人であると概要を述べた後、

(1) 今、CR 国は EU への加盟を進めるべく着々と準備を進めていて、そのために現在の 20 県 + 1 市 を、将来は 3 地区に分ける。

(2) DN 県は管内に 22 の市町村を有する。内、都市と呼べるのは 5 で、他の 17 は日本でいう町村だ。また島々が無数にあり、交通対策は DN 県にとって大きな課題である。

今の最大課題は、DN 県は CR 国の最南端にあることから、北側から来る人は必ず、BH 国のネウム (NEUM) を通らなければならないことだ。ユーゴスラビアからの分離独立後、他国となったため、BH 国には当然検問所がある。そのため、ネウムの少し手前で、ペリエシャツ半島に橋をかけて、BH 国で分断されず、国土が一体のものとなるようにしたい。

(3) しかし、これには BH 国側が難色を示しているようだが、CR 国内で行うことなので、1 日も早く完成したい。CR 国は $9,277 \text{ km}^2$ (九州の 1.5 倍) で、DN 県は全国土の 12.4% を占める大きな地域で、海岸線は 1,024 km もある。橋は、DN 県の悲願だ。

(4) DN 県の産業の中心は観光だが、インフラ整備が遅れている。高速道路は ZAG から SPL までは開通しているが、DN 県まで 2 ~ 3 年のうちに延ばしてほしいと要請している。

(5) CR 国は日本と漁業でつながっている。少し北部のサダルではマグロを日本へ大量に送っている。日本への輸出の 90% はマグロだ。

(6) 日本は豊かな歴史と文化があり、素晴らしい。企業活動の盛んになることを期待している。また、日本人は非常に細かな気をつかう民族だ。風邪をひいた時、他人に迷惑をかけないようにとマスクをすることでよくわかる。他人に迷惑をかけないのが日本人だ。また、私は黒澤明監督の作品が好きだ。

(7) 我々は、森・公園・池などの自然を大切にしている。世界遺産に指定されているこの地を守りぬきたい 等々と、述べられた。

この後、議員団から、大阪府は880万人が暮らす町であることを説明するとともに、DN県を訪れる観光客の分類や特徴、最近の変化、経済活動などについての質問をした。



これに答えられた後、DN県は、ZAGにある日本の大使館とも良好な関係を保っている。将来的には経済的な交流が進むように願っている。そのため、CR国の製品の品質を一層向上させたいと語られた。

また、最後に同氏は、「我々も日本の大都市の議員が副知事と会って交流したと紹介した

いので、議員側の撮影した写真をぜひ送ってほしい」と述べられた。(帰国後、同氏を通じて県副知事宛にメールでこの時の写真を届けた)

15:40に終了し、全員で記念撮影をし、県庁を後にしたが、庁舎の周辺にも私達が聞いていたとおり、内戦時の激しい銃撃や空爆の跡を示す弾痕がまだかなり残っていた。



次いで私達は、DBV市の観光協会を訪問することになっているが、担

当のマヤ ミロビッチさんが海岸にあるレストランを会場に指定。夕方までかなり時間があるので、ここでコーヒー・ジュースなどを飲みながら和やかに懇談した方が良さだろうと、セッティングされたようである。同氏はまた、私達からのあらかじめお願いしておいた調査項目のため、40ページ近い資料を作成して来られていた。改めて感謝申し上げる。

- ・ 応接者 DBV市観光協会 PR担当 マヤ ミロビッチ氏
- ・ テーマ 観光都市としての具体的施策など

4:05から始まった懇談は、まず議員団から「今日は夕方の基調な時間をとっていただいて恐縮している。先にお知らせしているように、大阪は観光客増の努力をしている。DBVは内戦の大変な傷跡から見事に復興され、観光客も急激に増えてきているようで、是非どんな努力をしてこられたのか聞きたい」と挨拶。

ミロビッチ氏は「DBVの取組みと概要を説明する」と、次のようなことを話された。

CR国のGDP中22%は観光だ。そのためには観光客の誘致、とりわけ、DBVへ来てもらいやすいようにする施策が必要だ。

そのため、国内外の人達がお金を使い易いよう、あらゆるクレジットカードが使えるように努力した。

CR 国にはここ 2 ~ 3 年前から、日本人は多く訪れるようになった。

2006 年 62,987 人 延べ 96,850 泊

2007 年 83,346 人 延べ 127,319 泊 と、約 30%の増加になっている。

悩みは、人口 49,928 人の内、旧市街には約 3,000 人が住んでいるが、これは 6 ~ 7 年前に比べると、400 人以上の減少。若者は特に旧市街に住みたがらず、家を売って新市街地へ移っていく。

19 世紀の後半から観光が大きな収入源となり、20 世紀初めから第二次大戦頃にかけてホテルの建設ラッシュが続いた。しかし、内戦で大打撃を受けた。その後 1997 年には 30 のホテルで営業ができた。10 年後の 2007 年には 41 ホテルで営業している。

宿泊施設の内訳、観光客の国別内訳、日本人の年別訪問数は略。

最近で残念なのは、大型クルーザー（豪華客船）でやって来る客が 1 年で 30 万人を下らないが、この人達は 1 人として宿泊しないことだ。このクルーザーが接岸すると乗客 1 人当たり接岸税 2.5 €、ごみ・水補給などの経費 8 €で収益が上がらない。地中海で船が接岸する港の順はバルセロナ、ヴェネチア、ジェノバ、チリタベキア、DBV となっている。

DBV では季節毎の様々なイベント実施しや割引券の発行を行い、1 人でも多くの観光客誘致をと頑張っている などである。

また、議員団からは、

1. 内戦であれだけの被害を受けながら、どうして復興できたのか、またどんな順位をつけて復興を進めたのか。
2. 難民がかなり出たと言われているが、どのようにその対策を講じたのか。
3. ようやく復興し始めた時、コソボ紛争が生じ、空爆のため、また観光客の出足が止まったと聞くがどんな状況であったか。

などの質問を行った。私達のこれらの質問などに同氏は、

DBV は 91 ~ 95 年の内戦での被害が 20 億 \$ にもなり、さらに難民が 17,000 人も出た。約 5 万人の人口中 1/3 にあたる 17,000 人が家を無くし、生活の手段を失ったことになる。

そのため、政府と DN 県、DBV 市は当時のホテルの多くを難民を収容する「家」として提供し、その後 5,575 戸の倒壊した住宅の再建・修復に取り組んだ。

これに約 2 年を要したが、このことによってホテルが機能するようになった。難民があふれていては観光客も来ないし、その観光客を泊めるためのホテルも通常に機能しない程の被害を受けたため、当時の対策は適切だったと思う。

97 年に多くの人達が元の家に戻り、30 のホテルが機能を回復させたことから 98 年には観光客がかなり戻ってきた。

しかし 99 年にコソボ紛争による空爆が行われ、また観光客はガタンと落ちてしまった。2000 年になってやっと観光客が戻り出した。

91年からの内戦での空爆で67%の屋根が壊された。これをカテゴリー1～6に分類し対応した。さらに96年までの間、米・英・スウェーデンなどの人道的活動団体が学校などの復旧に力を入れてくれた。

しかし96年にストーンという町が地震で大被害を出した。まさに最近は苦難の連続だが、頑張っ

て乗り越えてきた。CR国の観光局の事務所が日本に出来たので今後、多くの日本人が観光に来て欲しい。

などと熱心に説明された。

その後、同氏と記念撮影を行い、終了した。もう17:40になっている。



17:50 バス乗車。ホテル(ドブロブニクプレジデント)へは約10分で到着する。ホテルに届いていた府庁控室からのFaxを2部コピーし、お互いに分けて読むことに。それぞれが18:10部屋へ行く。私の部屋は329号室。SPLのような部屋ではないが、ZAGよりはずっといいし、目の前に海が見えて広々としている。今日は長いバスでの移動だったこともあり、トランクを開き、スーツやカッターなどを吊るす。二連泊できるのはありがたい。

18:50 ホテル6F(7Fが正面玄関)のレストランへ。19:00からビュッフェスタイルの夕食予定であったが、宿泊客が少なく、セットメニューに変更させていただきたいとのホテル側の要請で魚料理に変更。スズキ(魚)とポテト、野菜サラダなどのメニューだが、なかなか美味しい。日本で食べるスズキに比べるとだいぶ小さい。ビールやワインなどをいただき20:10に終了し、各部屋へ。私が部屋に帰り暫くすると、国友さんとホテルのフロントから人が来て、セーフティーボックスのトラブルを調整してくれた。これで使用が可能になった。

20:30 今日一日のことをメモしながら、いただいた資料を整理する。風呂もゆっくりと入ることができた。2年前のウズベキスタンの時は風邪を引いていたので、夜、風邪薬や疲労回復剤などを飲んだが今回は本当に体調もよい。それに天候にも恵まれ大阪を出発してから今日まで一粒の雨も降らないし、例年になく暖かい春だという。ただその分、日本は急激に冷え込み、私達が出発する時には半分咲いていた桜が「縮み上がっている」らしい。

23:30 就寝。

DBV市の観光と復興策 (4月3日)

目が覚めると7:15。暫くすると7:30のモーニングコールがあった。CR国に来て毎日モーニングコールがあるが、日本や欧米諸国と違って、すべてホテルの担当者が順に肉声でかけてくる。だからこちらからThank youと言うと、その時々によって返事はちがうが、O.K, Have

a nice day! のようなことを言う。ベッドの傍にアラームをセットするものも無いし、そういった面では相当遅れている。私達が府庁から送られてくる Fax を何部か作成しようとコピーを頼んでも、一枚一枚ガラス板の上に置いていく方式のコピー機である。世界中、電子機器の改良は目覚ましいものがあるが、不必要なまでの機能が付いていてそれを十分にこなすことができないというよりはずっと良い。

8:10 に 6 F のレストランへ朝食に向う。この日もお決まりのメニューであるが、不思議なことに生野菜がない。私はコックにオムレツを注文し、玉葱やピーマンなどの野菜炒め、シリアル(コーンフレーク) + 牛乳、フルーツ(パイン、グレープフルーツ、リンゴ)、リンゴジュース、ヨーグルトとコーヒーにする。30 分程度で食事を終え、私はこのホテルの特徴のケーブルカーのようなエレベーターで 1 F へ降りる。各部屋も EV もすべてがシービューで静かな海面が美しい。

今日は事実上、今回の視察の最後の日。8:55 にロビーへ行くと半分の議員がいる。9:13 バス出発。約 20 分で旧市街に到着するが「小高い場所から城壁に囲まれた旧市街の全容を見ていただきたい」ということで展望台へ。旧市街の城壁と何百年を経た住宅などの様子がよく見えるが、どこが空爆などで破壊されたか、この場所からでは想像もつかない。私達の立っている横にはこの国の花「菖蒲」が青い花をつけている。10~15 分くらいで旧市街へ戻り、プロチェ門から早速、スポンザ宮殿内の戦争博物館へ入場。

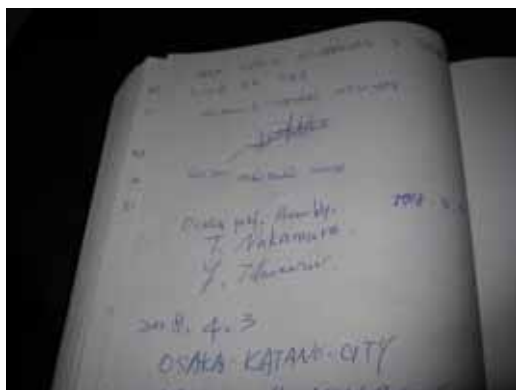
ここには内戦時の状況を後世に伝えようと様々なものが展示されている。チトー大統領時代~ユーゴ軍との内戦によって傷ついた市街の状況や、多くの戦死者の遺影が掲示されている。1991 年 12 月 6 日の突然の空爆で亡くなった人たちがほとんどだが、改めて、戦争の悲惨さを思う。特に目を引いたのは、DBV に対する空爆の状況を示す下の写真。印の付いている家に命中したという。67%の屋根が破壊され、石とレンガで造られた家でも火災はかなり激しかったようだ。米・英はじめ多くの国の元首や著名な政治家もここを訪問し、サインを残している。私達も



ここにサインし、市庁舎へ向った。

10:45 に市庁舎(昨日の副知事に会ったのと同じ庁舎)に入った私達を、DBV 市の多くの関係者が温かく出迎えてくれた。

・ 応接者 ドブロボニク市再建機関長 イ
ヴァンナ・イエモ氏



	ドブロブニク市再建機関員	アンドリア・トリア氏	
	”	イレーナ・ルドロ氏	
	ドブロブニク市環境整備課長	ニケ・スタレヴィチ氏	他
・テーマ	ドブロブニク市の都市再建について 内戦後のインフラ整備と官民の連携について		

10：45 DBV 市の関係者と意見交換を始める。最初に議員団からイヴァンカ・イエモ氏に参加者リストと記念品を渡し、挨拶。DBV 市側からも、歓迎の言葉が述べられた。

(1) DBV 市の説明

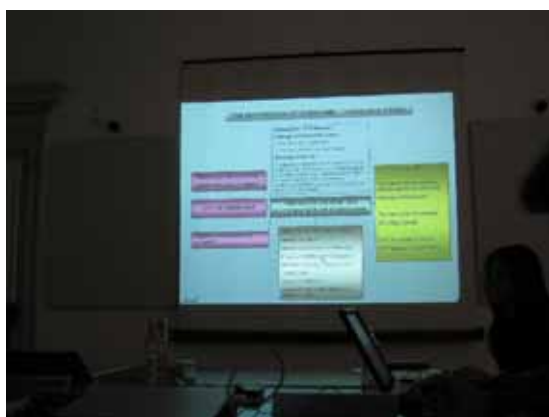
DBV 市に破滅的な打撃を与えた地震の後、1979 年に復興のため、再建機関を設立し、組織的な修復・復興にとりかかった。特に国は特別法を制定し、歴史的施設を中心に取り組んだ。

この際の特別法によって、修復・復興に必要な費用の 60%を国が、20%を県が負担し、残る 20%を市が負担することとされ、どの部分からどのように対策を講じるかは、市の機関によって決定することとなった。

(この点は日本の状況とよく似ていて、都市が計画を立て、それに国や県が一定の割合で負担するというのと同じである)

この地震への対応が軌道にのりかかった時に、ユーゴスラビアの内戦が勃発し、特に 1991 年 12 月の大規模な空爆によって大ダメージを受けた。この時の状況は詳細に写真を撮り、現在は CD でも保管している。直撃弾が 314 発、旧市街地の 70%の施設が被害を受けた。

しかし、当時の市民は厳しい中でも一丸となって復興に取り組み、ようやく今の姿にすることができた。まだ地震で倒壊したままのものや、銃弾の後が生々しくのこっているところもあるが、観光都市として、ますます世界の人々にお越しいただきたいと説明があった。



(2) 議員団の質問と意見

この説明の後、議員団から「私達も第二次世界大戦では、DBV 市と同様に大阪空襲を受けて焼け野原となったが、府民の力で復興して今日を築いた。まだまだ厳しい状況が続くだろうが、市民のため、また世界遺産を守るために頑張ってもらいたい」と、エールを送り以下のよ

うな質問を行った。

復興計画の策定のため、どのような方式をとったのか

復興計画に住民の意見はどう反映しようとしたのか。また、現実はどう反映されているか

一部地域に高層ビルが建っているが、街並みのイメージを守るため、どのようなコントロールをしているのか

旧市街地の土地の権利者は個人か。また売却しようとするれば、建築物そのものが世界遺産であり、行政はこれにどう関わるのか

復興費は膨大なものと思われるが、ユネスコなど、CR 国以外の資金援助や人的支援はどうであったか など。

これらの意見交換が約2時間あった後、プロジェクターを使っての説明資料などをもらい、記念撮影を行った。最後にイエモ氏らは「私達の説明をもっと理解してもらうのに、城壁の上をゆっくりと歩いて欲しい。そうすれば地震で倒壊したままのものや爆撃を受けたもの、また復旧した屋根と無傷で残った屋根との違い、旧市街地内に住み続ける人達の状況が良く分かる」と言われた。私達はお礼を述べて庁舎を出ると、何と外は雨。CR 国で初めての雨で、傘をさすことに。国友さんから「午後から雨が降るかもしれないので用意を」と言われていたので折りたたみ傘をバッグに入れてきて正解だった。

庁舎

を後にした私達は早速、昼食のレストラン MIMOZA へ。もう1時前である。公式訪問はこれで全て終了したので、みんなで「お疲れさん、いい勉強になった。誰一人体調を壊さないで良かった」などとお互いを労いながら、ビールで乾杯。メニューはパステイツァダ(牛肉と野菜の煮込み)、スープ、フルーツサラダ。食事をいただきながら長束氏と国友さんが「DBV 市の関係者の話のように城壁の上を歩いて見学したいが、調査資料などを手にしているので一度ホテルへ帰り、服装もカジュアルなものに変えてゆっくりとされてはどうですか」と提案。14:10 にホテルに戻る。また、2人は議員団に「明日は目茶苦茶早い出発ですから、できれば早めに荷物を整理しておいてください」と言う。

私はこれまでの資料を整理するとともに、今日のことを少しメモする。15:00 過ぎに国友さんが「洗面所の修理はきちんと出来ていますか？」と聞いてくる。これは昨夜、ホテルの私の部屋の洗面所で不具合なところがあるので修理して欲しいと頼んでいたからで、「直っている」と伝える。

16:00 に出発することになっているが、片付けが早く終わったのでケーブル型のEVに乗って1Fに降りる。いま雨は止んでいるが、これまで明るい陽射しのもとでキラキラ輝いていた海面に間もなく雨粒が落ちてきそう。夏になると数多くの人達が訪れ、浜辺で寝そべったり、海に入ったり...で賑わうのだろう。これまで一度も雨に遭わなかったのが不思議な程、好天が続いた一週間だったのに、最後に少し残念な気がする。小止みになっているので城壁の上は歩けるだろうと16:00に出発。約30分で到着するが雨足が次第に強くなってきた気が

する。私達はピレ門（西）、プジャ門（北）、プロチェ門（北東）、ポニテ門（南東）と4つある門の内、プロチェ門から旧市街に入る。旧市街を取巻く城壁は全長 1,940mで、高さは少しばらつきがあるものの、高い場所では 25mにもなる。さらに壁の厚さも海側で 3 m、山側では 6 mにもなるところがあり、堅牢である。かつて 1667 年、旧市街を壊滅的なまでに破壊した大地震の際にも、この城壁はほとんど影響を受けなかったという。



私達が城壁に上ると、「この上を歩けばDBVの歴史がわかる」と言われるとおり、地震で何の跡かと思う程に壊れて基礎だけになったもの、空爆で屋根を破壊されたために新しい瓦を載せた家と被害にあわなかった家の古い瓦との対比がよく分かる。また、雨の中に煙っではいるが、茶色の屋根と海や山とのコントラストは実に見事である。



その一方で、世界遺産の旧市街に住む人が外へ出ていきたいと言うのはあたり前で、多くの人達が歩く城壁にピタッとひっついて建っている民家は、家の中が丸見えで、生活の様子や TV の内容まで分かるのだから、気の毒としか言いようがない。また、かつては修道院だったという建物は今、立派なレストランに様変わりしている。世界遺産で建替えも自由に出来ないし、ならば売却して他へ移りたいと多くの人達が思い、少しずつ入れ替わっているというのがよく分かる。

雨脚はますます強くなり、猛烈な横なぐりの雨風で傘が飛ばされそうになり、早々と 50 分で切り上げ、スポンザ宮殿前に集まる。今 17:30 でこの後の約 1 時間をフリータイムにする事を決める。国友さんが、「18:30 には夕食のためにレストランへ行くので、必ずこの場所に戻ってくるように」と言う。私は A 議員、B 議員とメインのプラツァ通りではなく、もう一つ南側の細い通りへ入る。ここはメイン通りのような華やかな感じのレストランやブティックはないが、それでも同じように店が建並んでいる。ある小物売る店舗に入ると、女性の店員が何か「……」と言う。2 ~ 3 度聞くと、どうやらこの店は 18 時に閉めるので、早く終わって欲しいとのこと。「OK」と言うと笑顔に戻る。ところが閉店の準備をしていたため、コンピューター関係の電源を落としてしまっているため「カード x、レシート発行も x」おまけにお釣りも十分でない。何という店だと思うが、これがこの国のお国柄なのだろう。

私はラベンダーなどの香りのする 2 ~ 3 の品物を求めた。衣類でもなかなかおしゃれなも

のが置いてあるが、ポロシャツなど 25,000 円以上もする。SPL 市の関係者もここの物価、とりわけ観光客向けの商品は割高だと言っていたのが理解できる。

私達は CR 国で最後の夕食を、旧市街地の中のレストランで楽しむ。メニューは前菜がたこ料理で、メインは海老や焼き魚。たこにドレッシングをかけてあるのが何ともうまい。



この 1 週間を振り返りながら、わいわいがやがやと話題も色々で、20:10 に終了。旧市街地の中にはバスが入れないので、またプロチェ門へ急ぐ。20:20 バスに乗車してホテルへ向うが、もう先ほどのような激しい雨ではない。帰りは車も少なく 20:30 にホテル着。国友さんが明日の朝方の予定を改めて説明する。4:30 モーニングコール、5:00 荷物回収、5:30 ロビー集合で、朝食は簡単なものをホテルで用意するとのこと。

さっそく部屋に入り、バスタブに湯を張りながら荷物の整理。緑茶を飲んで風呂に入り落ちつく、もう 23:00 になっている。明朝は早いので就寝。

クロアチアで気づいたことを少し

< 1 > クレジットカード

出発前に購入した地球の歩き方「クロアチア・スロヴェニア」によると、「CR 国ではクレジットカード、国際キャッシュカードが使える ATM は広く普及している。クレジットカードで支払える場所も多く、中級以上のホテル・レストラン・ショップで可能」となっていた



が、現実には、JCB カードはほとんどダメ。私は以前から観光関係者に、ヨーロッパの場合、JCB はできるだけ避け、VISA などにしたほうが良いと言われていたので、今回も VISA にしたが、これは正解だった。写真のようにほとんどの店はこのような表示になっている。日本では JCB はメジャーだから、うっかりと日頃使っている JCB カードを用意されていた方は、さっぱりだ。折角の旅行案内書なんだから...、と思う。

< 2 > 市場経済化への努力と価値観

長く独特の社会主義体制を続けてきたこの国は、いま市場経済化への取組みが急ピッチである。しかし、ZAG 市の健康労働社会福祉課、教育文化スポーツ課の説明でも、人口規模に

比べてよくこれだけ公共施設があるなと思うほどに多い。さらに老人ホームを 12、交流センターを 10 というように、まだまだ施設建設を進めるといふ。果たしてこれで、財政的な問題を生じさせないのだろうかと思うが、福祉・教育は政治・行政の根幹であり、財政的見地からの、いわゆる経済効率中心での分析自体に問題があるという考え方である。振り返るとかつて、私自身がフランスのストラスブールへ「トラム」の視察に行ったことがあるが、ここでも同じように、「採算ベースがどうかということは一切関係ない。市民は豊かで安全で便利な交通体系を築くことを切望している。トラムについては財政上の見地からの検討は一切しないし、これからもそうだ」と言われた。

私達とは価値観が違うと言えばそれまでだが、この考え方は極めて大事なことを私達に教えている。いま大阪府の危機的財政状態を打開するためだと、橋下知事直轄の改革プロジェクトチームが出した試案は、様々な問題点を孕んでいるが、CR 国のこの考え方を少し参考にすれば、多くの府民に賛同される試案に変わるのではないだろうか。

多くの思い出を胸に帰国（4月4～5日）

今日はいよいよ帰国の日であるが、なぜか 3:00 に目が覚める。まだもう少し時間があるのでまた寝るが、4 時にもう一度目が覚める。4:30 のモーニングコールまでそれほど時間がないので、起床する。パジャマや洗面具などをしまっておいて荷づくりをし、ドアの外に出すとポーターが 5:05 に取りに来る。今朝の食事はサンドイッチとジュースのようなものと聞いているので、昨日もらっておいた完熟バナナを 1 本食べる。

5:15 忘れ物がないかチェックしてフロントへ行き、チェックアウト。ロビーにはもう 3 人の議員がいる。長束氏と国友さんがそれぞれの議員に用意した朝食を渡すが、普通のサンドイッチだと思っていたのに、大きなフランスパン 1/2 にトンカツをはさんだカツサンドとオレンジジュース、みかん、水である。さっそく私達はこれにパクつく。こんな大きなパンが用意されているんだったら、バナナなど食べなくても良かったくらいだが、2/3 くらい食べた。アゴがだるくなるほどに固くて大きかったが、割合においしい。朝の 5 時過ぎからこれだけ食べられるのは健康な証拠と自分で納得。

5:40 にバスは出発し、5:55 に DBV 空港着。ここにはポーターがないので、自分で荷物を運ぶ。チェックインカウンター前で国友さんから航空券を受取り、トランクを預け、搭乗手続きに行く。するとそこで何か聞かれるが、CR 語なので、さっぱり分からない。I don't understand と言うと、言い直したのが「Window? 」と聞こえるので、窓側か通路側かということだろう。国友さんに確認するとそうだということで、来る時は通路側だったから、今度は窓側と言うと「OK」という。ところが渡されたチケットは、FRA 行き KIX 行きの両方とも通路側。これは違うということ、無視して返事をしない。また国友さんも「間違っている、この人達は絶対に変えないですよ」という。これなら何も聞くことはない。こんなところが日本と大違いだ。私自身、長旅の時は自由に動ける通路側の方が好きだから、これでよいのだが、すっきりしない。欧米ではしょっちゅう出くわす事だが、これは本来、日本のすべての

ツアー関係者がしっかりとっておかなければならないことで、煩わしいことには関わりたくないとか、これがこの国では普通だからと放置してきた責任であろう。お客のため、「日本ではそんな態度は理解されない。こうしなければいけない」と、しっかりと対応する姿勢を常にとっていれば、相手の対応は変わってくる。ただ、この場で急にどうにもならないことは理解できるし、「おかしいではないか」などと言うと、長束氏も国友さんもいやな思いをするのはわかっているので、これで終わりに。こんな時にしっかりと対応させられるよう、ホテルや航空会社などに働きかけ、改善への努力を行っていく旅行会社こそ信頼され、これからの成長株になるだろう。

さて、私達はCR国へ来た時と同様にセキュリティチェックを終えて中へ入り、出国手続きへ。IMIGRATIONの標示もないし、係官が一人ポツンと座っているだけで、ロープなどの仕切りもされていない。あれだけの戦争が続いていたのに、大らかなものである。7:00 搭乗手続き開始と示しているのもう少しだけ時間がある。CR国のテレホンカードで大阪へTELするとお昼の2時で、1回の通話で8Knしか減らない。7:15 搭乗開始のアナウンスが流れ、自分で歩いて飛行機へ。私の席は21・A。機内は空席が半分以上ある。7:30 離陸し、30分ほどすると軽食が運ばれ、固めのヨーグルトを食べる。コーヒーを注文してくつろいでいると、すぐにドイツのFRA空港に着く。丁度9:20であるが、ここで出発時と同様に5時間待ちとなる。FRA空港はアメリカのブッシュ大統領の到着を目前にして厳戒体制が叱れているため、私達はC13ターミナルへ。このターミナルは1週間ほど前にオープンしたばかりのようである。

休憩する場所もほとんどないため「しまった」となったが、仕方なくトイレの隣の待合室へ。ビールでも飲んで時間つぶしと思うが、朝の10時頃からそんなに飲めるものではない。

ドイツ名物の大きなソーセージをみんなで分けて口にするが、なかなか時間は経たない。反対側に1つだけある免税店へ行き、妻と娘らに化粧品でもと思って国友さんについてきてもらう。そんな時間はわずか30分くらいなので、椅子に座って仮眠する事にする。昨夜の睡眠が少なかったのか不思議にウトウトできるもの。



13:40 ようやく「まもなく搭乗手続きを始める」というアナウンスがあり、待ちかねた人達がワッと並ぶ。自分自身の座る席は決まっているのだから慌てなくても良いのと思うが、気持ちはよく分かる。14:00 から次々に乗り込んでいく。私の席は来た時とほぼ同じで54・C。ただ、このLH 740 便は1週間前と違って、個人用のTVがなく、天井から一定の間隔でTVがぶら下がっているという旧型。だから、映画なども自分で自由に選択できるものではないだけに、退屈する人も多いただろう。14:30に離陸。

機内放送は、独・英・日本語があり、映画を3本上映するという。英・独・仏・韓・中・スペインとともに日本語吹き替えもある。FRA - KIX で、なぜ韓国語や中国語、スペイン語などがあるのかわからないが、この飛行機自体、いろいろな国へも行っているのだろうと思う。

16:00 に昼食を配り始める。前菜は切干大根、肉じゃが、茶そばなどで、メインが豚肉か鶏肉を選んでほしいというので、「チキン」と言うと鶏肉、ハッシュドポテトなどが入っている。「ポーク」と言った人には黒胡麻ご飯が出ているので、隣の半田議員と「これは腹がふくれないナ」と話す。ドイツビールを飲んで、日本はもう夜の11時だから寝ておこうと思うが、体が1週間ほどの間にヨーロッパ型になってしまっているの、なかなか眠くならない。立ち上がって、機内をウロウロとすることに。私の席が最後尾部分なので、前まで行くと、何と途中で2席、私の2つ後ろに1席、合計で3席しか空席がない。300人以上乗れる機でこんなと思う。しかし、考えてみると、3月29日の出発の時もそうだったが、春休みを利用して旅行をという人達が家族連れも含めて多かった。帰国便も家族やグループの人が多い。FRA でほとんどが乗降というのは、ロマンチック街道やスイス、イタリア、スペインなどの旅行だったのだろう。

機内 をウロウロしても10分くらいなので、私は会派の政調会で橋下知事のプロジェクトチームに対する検討チームの出資法人・総務部会を担当しているため、ふ厚い資料を取り出して読むことに。時計はちょうど17:00になったので、日本時間に合わせる。いま日本は4月5日0:00である。KIXまでの飛行はまだ8時間半ほどある。CAにコーヒーを頼んでもってきてもらい、2時間余り読み続ける。

2時間ほど経つと立ち上がって、またトイレへ。ちょうどこの時間帯は多くの人が目を閉じてお休み中。後方のトイレ前の少し広くなった所で手足を伸ばして体をほぐしていると、横にお握りがたくさん並んでいる。「これ、もらうよ」と言うと、「どれでもどうぞ」と返事があるので、鮭のお握りをもらっていく。席に戻って、TVも見ないし、もう役所の資料を読む気もしないので、少し休もうと目を閉じる。

1時間程度もウトウトしただろうか、後ろを見るとU議員も暇を持て余した風で、N議員は目を閉じている。T議員が熱心に資料を見ながらメモをしている。そうこうしているともう午前5時で、1週間滞在したCR国では今ちょうど4日の夜の10時になる。なかなか休もうとしても休めないのは当然だ。しかし、帰国後の日程を考えると、少しは体を休ませなければいけないと考えながら外を見ると、まだ真っ暗である。6時過ぎの日の出までは少し時間がある。

周囲に何も無い真っ暗な空の一角から太陽が昇る様子は、何度見ても感動する。6時を過ぎると、窓の外に少しだけ青紫色の線がおぼろげに見えてくる。そしてこれが次第に白みを増してくると、太陽の頭が見える。いつも思うことだが、地平線、水平線があるんだからこれを天平線と呼べばどうだろうか。

6:27 ついに太陽の端っこが出てくる。次第にそれが上に姿を現し、段々と丸く大きくなっていく。毎日毎日繰り返される当たり前の光景であっても、美しく神々しい。同じように見ている議員も「こりゃスゴイ」と感心している。大きくなる様はまるでスロービデオを見ているみたいで、私は一気に 20 枚余りの写真を撮った。6:32 明るくなりすぎて、もうカメラには収められない。わずか 5 分ほどの天体ショーだが、10 分ほどすると CA が朝食を配り始める。チキンのシチュー・パン・フルーツ・コーヒーを残さず食べる。

周囲は一気に朝になり、動きが出始める。CA も 40 分足らずで片付けにくる。暫らくすると、あと 20 分程度で「KIX 到着」という表示が画面に映る。飛行機の高度も随分と下がってきたのが分かる。窓際の議員が、「ウワー、ひどい赤潮だ」と言う。私も窓から下を覗くと、茶色の幅広い帯が海面に際立っている。気持ち悪いほどの色で、空港に近づくにつれて色が赤みを増す。今の時期からこんなことだったら、大変だなと思ってしまう。

8:25 に KIX 到着。再入国手続きをし、荷物を受け取り 9:45 に解散。6 泊 1 機中泊のクロアチア訪問はすべて終了である。



視察調査を終えて

クロアチアと言えば、大抵の人はサッカーや格闘技が盛んな国で、著名な選手も多いと思っている。私達は今回の視察で、クロアチアの様々な話を聞き、また直接現地を見聞し、この国がこれまでの歴史の中でどのような位置に置かれてきたのか、そして激しい内戦の末に手にした今の国情がどうなのか、おぼろげながらに理解できたと思う。さらに、市場化の流れが国民の暮らしをどの様に変えようとしているのかも知ることができた。

ザグレブでもスプリットでも、そしてドブロブニクでも、関係者は「これまでの列強による支配と内戦で、多くの人々が命を落とした」という説明をするが、それ以外の悲しい出来事にはやはり言葉を濁しているなと思う。長束氏の説明などによって、今なお続く困難な問題は理解できるが、戦争はいかに人権を踏みにしり、複雑で悲惨な結果をもたらせるかを改めて学ぶことになった。ぜひ、多くの国会議員がこの地を訪れ、私達と同じ思いを持つこと

ができれば、いま何をなすべきかを理解できるだろう。これらを私達に理解しやすく説明された長束氏の、ユーゴスラビアとクロアチアの歴史への認識の深さには敬服する。行く先々で同氏に、知人と思われる人達から笑顔で声がかかる姿を見ていると、同氏がしっかりとこの地に根付いていることが分かる。

この国に滞在したのは僅か1週間のことであったが、美しい風景と貴重な歴史的遺産、そしてこの国の人達の価値観は長く記憶に残ると思う。

お世話になった皆さんに感謝

今回の視察では多くの方々いろいろなとお世話になった。普通の観光では余り訪問することのないCR国での諸計画を練り、関係機関との調整などを進めてくれた方々や、視察補助員として1週間頑張ってくれた国友美紀さんに深く感謝する。また、お忙しい中を専門的な立場からご指導いただいたCR国前国会議員のトンチ タディッチ氏には殊の外お世話になった。さらに、日本の旅行社が現地事務所も構えていない中、奔走していただいた長束恭行氏には、いたる所で(延べ5時間以上も)レクチャーをしていただいた。今回の視察でお世話になった方々のご健勝で、これからも益々ご活躍されることを、心から願っている。

お世話になった方々 (敬称=略)

スルーガイド 長束恭行 ... 1973年名古屋市生まれ。同志社大学卒、ザグレブ大学クロアチア語コース終了。東海銀行に勤務したが、1997年に退職。2001年9月からクロアチアの首都ザグレブに住み、クロアチアのスポーツサイトのカメラマンや取材コーディネーター、通訳を業とする。2003年には日本バスケットボール男子代表監督のジェリコ・パブリチェヴィッチ氏の専属通訳を務めた。学生時代にはクイズ番組に多数出演し、準優勝をしている。

トンチ・タディッチ ... 2002~2008年までクロアチア国会議員(クロアチア権利党)。2004年にはクロアチア日本友好議員連盟を設立し、自らその会長に就任。2005年の愛知万博では副首相を初めとする代表団のメンバーとして訪日し、大阪府・大阪市も訪問した。同氏は3月31日のところでも記述のとおり、かつて池田市の通産省工業技術院に在籍された理学博士でもある。

このレポートについてのお尋ねは、下記へどうぞ。

- ・大阪府議会議員 中村哲之助事務所 Tel 072-844-8888 Fax 072-844-4444
- ・民主党無所属ネット議員団控室 Tel 06-6941-0219 Fax 06-6941-8411